



大谷徹英氏
法政大学山崎副学長

**自己との対話を
惑わさない生き方を**

生涯を通じて教育現場に在りつづける大谷副学長。児童・生徒の成長に「この子の将来」をどう見守り、どう支えるかについて、常に自分自身と対話を重ねてきた。その対話の軌跡を、自身の経験と対話を軸として、子どもたちへのメッセージとして綴る。大谷副学長の生き方から、子どもたちへのメッセージを学ぶ。

から、私は、つら
師匠だったろう
。さらに、衣袋三
師匠だったろう
もそういう人たち
り越えようとして
いた。むしろ、その前後にどう子どもと向き合っ
ているのか、教師としての生き方に大きく影響す
るのではないかと思います。

自己対話が自らを教える

■静思のすすめ

「静思」を観かれていますね。
「静思」とは自己対話のことです。自分に与え
られたものをしっかりと見つめ積極的に受け止め
ているか、初心を忘れていないか、相手の心を忘
れず自分の思いだけで生きていないか、といった
ことを自問することが第一歩です。私はよく、「あ
なたはひもで括られて仕事をしていますか」とい
うことを言います。例えば、会社員なら、あなた
を会社が括って入社させたのですが、学校の先生
なら、あなたを教育委員会が括って学校に無理
やり入れさせたのですか、ということです。考え
てみれば、自分で決めて仕事をしているのですか
というのを言います。例えば、会社員なら、あなた
を会社が括って入社させたのですが、学校の先生
なら、あなたを教育委員会が括って学校に無理
やり入れさせたのですか、ということです。考え
てみれば、自分で決めて仕事をしているのですか
というのを言います。例えば、会社員なら、あなた
を会社が括って入社させたのですが、学校の先生
なら、あなたを教育委員会が括って学校に無理
やり入れさせたのですか、ということです。考え
てみれば、自分で決めて仕事をしているのですか
というのを言います。

辛い、悲しいという現象だけを見るのではなく、ど
こに出口があるのか、自分は今何をしなければなら
ないのか、何のために何をすればよいのかという
ことを、自分に腹割りさせるための対話が静思
です。人の言葉に揺さぶられている間は自分自
身が見えてきません。自分の言葉で自分と対話す
ることが大事なのです。

——ご自身の静思は。
私も迷いはたくさんあります。しかし、自分
だけが迷っているわけではないと思っています。
周りの人たちが何に迷っているのかを考えま
す。それから、自分に、どんな自分になりたい
のかということも問います。どんな自分でい
ればよいのか、法話の時にどんな自分をお見せ
できればいいのかということを常に考えます。

教育は200年の大系

■いのちをつなぐということ

——法話を通して感じたり考えたりしたことは。
私は、東日本大震災が起ってからずっと被災
地を巡って法話をしてきたのですが、被災地を目
の前にすると、私がこれまで聞いてきたことは、
実は平和の時のだけの、机の上だけの学びだったの
ではないかと思ひ始めました。そう思いながら
自分の法話を振り返ってみたい。なんだか自分の
話が単なる自慢話に聞こえてきたんですね。そんな
時、学校法話の最中に、校長先生や教頭先生の
下には若い先生たちがいる、若い先生たちの前
には子どもたちがいて、子どもたちの先には、彼ら
から生まれてくる新しいいのちがある気がつき
ました。そうすると自慢話なんかはしる場合
じゃない、いのちをつなぐこと、生き方の大事さ
を伝えなければと思ったんです。

——いのちをつなぐということの意味は。
こんな話があります。今度話が生まれてくると
いうお婆さんがナポレオンのころにきて「何歳
から教育が始まるのいいでしょう」と尋ねたところ、
ナポレオンは「今度生まれてくる子から数
えて7代前から教育を始めるべきではないか」と
言いました。そこで、「それでは手遅れではないか」と
お婆さんが反論したら彼は、「あなた自身が7
代前と思って学んだら、7代先の子はきよ
よくなるだろう」と言ったそうです。1代が30
年くらいすると、200年先の子のことを考えよ、
ということです。同じ例ですが、アメリカン・ネ
イティブのイロコイ族は、会議をするときは7
代先の子どもたちを呼んで議論をするとい
います。私たちは、自分自身と対話する時、前

新教育課程 ライブラリ ダイジェスト版

第一人者による 解説

新教育課程型授業を考へる
アクティブ・ラーニングの理論と実践

- 新教育課程がめざすアクティブ・ラーニングとは
- 思考をアクティブにする授業とは
- プロジェクト・ベース学習(PBL)とこれからの学習づくり
- アクティブ・ラーニングの推進はいつから
- 子どもたちが自分たちで創り上げていく授業

●著者
新教育課程型授業の推進に努める小学校・中学校、特別支援学校
横浜国立大学大学院
特別支援教育研究センター
横浜国立大学高等専門学校
〒220-8580 横浜市磯子区磯子1-1-1
●発行
アクティブ・ラーニング型授業の始め方・学び方
2017年10月発行

**新教育課程がめざす
アクティブ・ラーニングとは**

文部科学省初等中等教育局視学官
田村 学

**アクティブ・ラーニングの始まりと
広がり**

中央教育審議会答申(平成26年12月22日)「新しい時代にあふましい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～(答申)」には、アクティブ・ラーニングを「学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていく能動的な学習を中心とした授業から、学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていくアクティブ・ラーニングに転換する」としている。このアクティブ・ラーニングという言葉は、中央教育審議会答申(平成24年8月28日)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学習及び、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」において「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒に学んで切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的な学習(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である」として示された。こうした大学教育改革の動きが高等学校の授業

求められる授業の質的転換

平成26年11月20日、学習指導要領の改訂に向けて文部科学大臣から諮問文が発表された。そこでは、変化の激しい21世紀の社会では、一人一人の可能性をより一層伸ばし、新しい時代を生きていく必要を資質・能力を確実に育んでいくことを目指し、未来に向けて学習指導要領等の改善を図る必要があるとしている。つまり、次期学習指導要領の改訂は、資質・能力の確実な育成にあるとし、そのためにアクティブ・ラーニングによる授業改善を目指すとしている。

諮問文では、学びの質や深まりを重視することを指摘した上で、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習(いわゆるアクティブ・ラーニング)とし、そのために指導方法等を充実させることの必要性などが示されている。今回の学習指導要領の改訂は、学習内容の付加や削除といった見直しのみならず、子どもが自ら学び、ともに学ぶアクティ

文部科学省による解説記事

平成27年の全国学力・学習状況調査で全国平均を大きく上回った事例などが満載です!!

子ども主体の授業づくりで学力向上を実現

**高知県越知町立越知小学校・越知中学校
越知町教育委員会**

【ルボ】

思考力・判断力・表現力を引き出す学習

越智小は、「学習過程スタンダード」と呼ぶ統一した授業構造をもっている。

①課題提示、②問いをもつ、③問いの共有、④自力解決、⑤集団解決、⑥価値の共有、⑦振り返り

これは、高知県教委が作成した「授業づくりBasicガイドブック」に基づいた授業構造である。授業の始めに子どもとの疑問などから、本時のねらいを明確にした課題設定を行い(課題提示)、子ども自身が自分事として課題を把握し(問いをもつ)、どのような方法で課題にアプローチしていくかを隣同士や班、学級全体で見通していく(問いの共有)。そして、自分自身で課題について調べたり(自力解決)、集団で考えを深めたりしながら(集団解決)、課題解決に向けたまとめを行っていく(価値の共有)。時には練習問題などにも取り組みながら学んだことを振り返る(振り返り)というものである。この学習過程は授業の内容によって柔軟な配分を行うことも考えられており、課題を発見することを重視する授業では①～③を、問題解決のプロセスを重視する授業では④～⑥を重点的に配分することとしている。

これは、高知県教委が作成した「授業づくりBasicガイドブック」に基づいた授業構造である。授業の始めに子どもとの疑問などから、本時のねらいを明確にした課題設定を行い(課題提示)、子ども自身が自分事として課題を把握し(問いをもつ)、どのような方法で課題にアプローチしていくかを隣同士や班、学級全体で見通していく(問いの共有)。そして、自分自身で課題について調べたり(自力解決)、集団で考えを深めたりしながら(集団解決)、課題解決に向けたまとめを行っていく(価値の共有)。時には練習問題などにも取り組みながら学んだことを振り返る(振り返り)というものである。この学習過程は授業の内容によって柔軟な配分を行うことも考えられており、課題を発見することを重視する授業では①～③を、問題解決のプロセスを重視する授業では④～⑥を重点的に配分することとしている。

1 基本 (同じ時間の比重)	2 課題に比重 (課題設定に比重)	3 解決活動に比重 (解決活動に比重)	4 振り返りに比重 (定義・定着)
課題設定 1 課題提示 2 問いをもつ 3 問いの共有 解決活動 4 自力解決 5 集団解決 6 ペア・班・全	課題設定 問いをもつ 問いの共有 解決活動 ・自力 ・ペア・班・全	課題設定 解決活動 ・自力 ・ペア・班 ・全体	課題設定 解決活動 ・自力 ・ペア・班 ・全体 まとめ 振り返り 練習問題

・教科の特性に応じて比重をかける。「知識の習得」は、2の課題設定である。

状況調査では、国語のA問題で全国平均を9.4ポイント上回るなど、国語、算数の両教科でA・B問題とともに全国平均を大幅に上回り、算数B問題を除けば、全国1位の秋田県を超える結果となった。同校が平成20年前後には高知県平均を10ポイント近く下回っていたことから驚異的な伸びだと言える。

子どもも、様々な意見を聞いたり発言したりすることで、より深く考えることができ、1単位の授業で学力が伸びるのか。「それは、授業力アップしかないですね」と園林康雄校長は言う。基礎学力は反復学習でもできるが、活用力は授業で育てるしかないとの考えだ。

授業の流れを統一することで、教師が課題を共有することになったのも大きいという。お互いの授業を見合い、「課題をしっかりとめかめた発問になっているか」「めあてに向かった授業の進め方ができているか」など、授業の課題を出し合いながら改善を図っていくことで、子ども主体の授業でありながら、授業力向上させているのが越知町のスタイルだ。

子どもも、様々な意見を聞いたり発言したりすることで、より深く考えることができ、1単位の授業で学力が伸びるのか。「それは、授業力アップしかないですね」と園林康雄校長は言う。基礎学力は反復学習でもできるが、活用力は授業で育てるしかないとの考えだ。

授業の流れを統一することで、教師が課題を共有することになったのも大きいという。お互いの授業を見合い、「課題をしっかりとめかめた発問になっているか」「めあてに向かった授業の進め方ができているか」など、授業の課題を出し合いながら改善を図っていくことで、子ども主体の授業でありながら、授業力向上させているのが越知町のスタイルだ。

教育News

OECDの「Education 2030」、学力の3要素にも対応し提言へ

教育ジャーナリスト
渡辺 道司

学習指導要領の改訂作業が、中央教育審議会が進んでいる。次期の指導要領をめぐる「アクティブ・ラーニング(課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び、AI)ばかりが目立ってくるが、根底には、各教科・領域等を貫く「育成すべき資質・能力」に基づいて、コンテンツ(内容)ベースからコンピテンシー(資質・能力)ベースへの転換を図る“指導要領の構造改革”があることを忘れてはならない。しかも、世界的潮流を受けた「コンピテンシーに基づく教育課程改革」は、もはや国内だけの議論にとどまらない。その成果が、経済協力開発機構(OECD)との共同取り組みを通して、新しい教育の在り方として世界に発信されようとしているのだ。

●共同プロジェクトが進行

「Education2030」。現在、OECDが進めているプロジェクトの名称である。OECDはこれまで、「能力の定義と選択」(DeSeCo)プロジェクト(1999～2002年)を通じて、PISA(生徒の学習到達度調査)などの基となる「キー・コンピテンシー」(主要能力)といった新しい資質・能力観を提示してきた。今回のEducation2030は、2030年に向けて各国の政策立案をサポートするため、キー・コンピテンシーの改訂を行うもの。当面、2015年から18年まで4年間にわたって検討することが

教育課程改訂の動向

学習指導要領等改訂の方向性と審議状況について

●学習指導要領等改訂のねらいと背景

平成26年11月20日、文部科学大臣より中央教育審議会に対して「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問が行われ、学習指導要領等の改訂に向けた検討がスタートしました。

変化の予測が困難なこれからの時代を生きていく子供たちには、自立した人間として自らの人生を主体的に切り拓き、他者と協働しながら、よりよい社会を創造していくことができる力が求められます。そうした力をどう育てていくか、そのための学校教育の在り方とは――、これらについて具体的に考えていくことが、今回の諮問のねらいです。

学習指導要領等の改訂は、これまでも約10年ごとに、その時々社会状況等を踏まえて行われてきました。前回の平成20年・21年改訂の際には、例えばゆとりか詰め込みかといった二項対立として捉えるのではなく、変化の激しいこれからの社会を生きていくために、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」のバランスのとれた力を「生きる力」とし、その「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などを育むことを目指して、学習指導要領等の見直しが行われました。特に学力については、「基礎的な知識及び技能」「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力」及び「主体的に学習に取り組む態度」の、いわゆる学力の3要素から構成される「確かな学力」をバランスよく育むことを目指し、教育

78

●ご注文・お問い合わせ先
 (株)ぎょうせい
 フリーコール 0120-953-431 フリーFAX 0120-953-495
 Web サイト http://gyosei.jp
 e-mail Eigyo-edu@gyosei.co.jp



ジャーナリストによる最新教育ニュース

巻頭インタビュー

2 自己との対話で感わない生き方を 大谷徹英 [法相宗大本山薬師寺執事]

特集

新教育課程型授業を考える —アクティブ・ラーニングの理論と実践

●解説—theme

- 18 新教育課程がめざすアクティブ・ラーニングとは 田村 学
22 思考をアクティブにする授業とは 齊藤一弥
26 プロジェクト・ベース学習 (PBL) とこれからの学習づくり 上杉賢士
30 アクティブ・ラーニングの指導案はこうつくる 藤村裕一
34 子どもたちが自分たちで創り上げていく授業 池田 守

●事例—case

- 38 子ども主体の授業づくりで学力向上を実現 高知県越知町立越知小学校・越知中学校、越知町教育委員会
42 21世紀グローバル社会に必要な豊かに学び合う力の育成 ~アクティブ・ラーニングの能力育成と活用するカリキュラムの開発~ 横浜市立白幡小学校
46 「課題達成学習」で学び続ける子どもを育成 福岡県春日市立春日東中学校
50 アクティブ・ラーニング型授業が学校を変える 横浜市立南高等学校附属中学校

●提言—message

54 アクティブ・ラーニング型授業の始め方・学び方 小林昭文

●参考—reference

連載

- 12 学校改革の新定石① 西留安雄
64 新課程を生かすカリキュラム・マネジメント① 天笠 茂
68 「育ち」と「学び」をつなげる授業① 奈須正裕
72 実践! アクティブ・ラーニング研修① 村川雅弘
76 ミドルリーダーが創るこれからの学校① 大脇康弘
78 教育課程改訂の動向 文部科学省初等中等教育局教育課程課

●教育長インタビュー—次世代を育てる地方戦略

60 まち総がかりで子どもを育てる“糸島教育”の挑戦 福岡県糸島市教育長 家宇治正幸

リレー連載

- 82 新学習指導要領に向けた指導の充実—今からできる授業改善のポイント [生活科・総合的な学習の時間] アクティブ・ラーニングの視点とカリキュラム・マネジメントの充実を授業づくりに生かす 田村 学
84 実践者は語る—授業で創る新教育課程 18歳になる未来のもう一人の私— 沖縄宮古島授業6年 善元幸夫

エッセイ

- 14 旅の moku moku 玉手箱① 山崎まゆみ
58 ホンとの出会い ふるさとに恋する観光小説—「県庁おもてなし課」 金丸弘美
90 リレーエッセイ・校長室の窓から ある母親から学んだ「ごめんね」 オランダ教育紀行 山口市立大殿小学校校長 山本晃久 東京都世田谷区立用賀中学校長 中村 豊

豪華執筆陣による すぐ役立つ連載!

学習指導要領改訂に向けた主要テーマを連載で詳細に解説していきます。



動きを毎月お届けします。

授業づくりのポイントが満載

子どもたちが自分たちで創り上げていく授業

東京都新宿区立西新宿小学校主幹教諭 池田 守



目指す授業

日々の学習の一面から

「学習計画表を見てください。今日は、浄水場で水道水がどのように作られているか調べます」...

このように、私が目指す授業は「子どもたちが自分たちで創り上げていく授業」である。子どもたちが主体的・協力的に問題を解決し、新しい知識や概念を獲得したり、新たな考えや価値を生み出したりする学びこそ、これからの時代を生き抜くための資質・能力を育成できる。

私は、こうした授業を成立させるために、学習方法を意図的・計画的に徹底して鍛えることを継続してきた。中央教育審議会教育課程企画特別部会から平成27年8月26日に示された「論点整理のイメージ」の中でも、「どのように学ぶか」について光を当てていく重要性が述べられている。今回は、私が授業を設計する上で大切にしていることを紹介していきます。

子どもたちが自分たちで創り上げる 授業を成立させる四つのメソッド

(1) 1単位の授業の流れの理解
子どもたちが授業を自分たちで創り上げるには、授業の流れを自分たちのものにしていなければ始まらない。そこで、まずは1単位の学習過程の基本形を子どもたちに示した。授業で大切な要素は、(ア) 子ども自身が問いをもっていること、(イ) 自分で考える時間が確保されていること、(ウ) 集団で比較・検討する時間が確保されていること、(エ) その時間で学んだことを自分たちで価値付けさせること、(オ) 自己の(または集団の) 学びや成長を振り返る時間があること、の五つである。こうしたポイントを押さえ、学習過程を設定した。

自分たちで学ぶ方法として、1単位の学習過程を、「①問いをもつ」「②自力解決」「③集団解決」「④価値の共有」「⑤振り返り」とした。自ら問いをもつ、問いと向き合い、友達との学び合いを通して自分なりの考えをまとめていく展開である。①~⑤の流れを常に意識して学習させるために、「先生にたよらず、自分たちで学ぶ方法」(図参照)を子どもたちに配布し、教室にも掲示した。

この基本とする学習展開を各教科で統一することで、どの子どもも安心して学ぶ姿が見られるようになった。授業の中で次に何を学ぶか分かってきたため、学習に対する意欲が高まった。子どもも、学習に苦手意識のあった子ども、特別な配慮を要する子ども、様々な子どもたちに対する大きな支援となった。授業のユニバーサルデザイン化の視点からも大きな意味があった。

(2) 自分たちで学ぶための言語の鍛え
学習を進める上で土台となるのは言語である。教科学習だけでなく、全教育活動の中で言語力を鍛え

I 先生にたよらず、自分たちで学ぶ方法



1 単位の学習過程としての問題解決的な学習の展開

Table with 2 columns: 学習過程の展開 (Learning Process Development) and 具体的な学習活動 (Specific Learning Activities). It details the steps from questioning to reflection and the corresponding activities for each.

個人学習・対面学習

指導案作成の 具体策がわかる

【特集】新教育課程型授業を考える—アクティブ・ラーニングの理論と実践 ● theme 4

アクティブ・ラーニングの指導案はこうつくる

専門教育大学院准教授 藤村裕一



アクティブ・ラーニングの指導案の大前提

アクティブ・ラーニング型学習の最終形態である問題解決学習は、約50年以上の研究の蓄積があり、その研究成果を生かすと、次のような大前提があることがわかる。

(1) 導入段階の重要性

アクティブ・ラーニングは、図1が示すとおり、学習の型3)の児童生徒主体の課題解決学習(学習課題は教師が提示するが、追究方法は児童生徒が主体的に決める学習: Project based learning)と4)の問題解決学習(児童生徒が学習問題を発見し、追究方法も児童生徒が主体的に決める学習: Problem solving learning)である。したがって、3)の場合には、教師が提示する課題がいかに興味関心をもたせるか、4)の場合には後に示す四つの方法のうちいずれかで児童生徒が主体的に追究しても必然的に本時の目標を達成できるような学習問題を開発することができる資料提示や活動設定をしなければならぬ。失敗事例の多くは、この段階をおろそかにし、児童生徒の興味関心・問題意識・目的意識を無視して、教師主導で「あて」と称して一方的に課題を提示してしまうのである。

(2) 「はい回る経験主義・子ども放任」とならないための「学び方」指導

いつも教師主導の授業ばかりしている学級でいきなりアクティブ・ラーニングをしようとしても無理である。そこで、図1のように授業の型を順次経験するようにして、各教科の問題発見の仕方、予想の仕方・仮説の立て方、繰り返し合うの仕方・発表・討論の仕方などの「学び方」を育成して、児童生徒主体としても、確かな学びを実現できるようにすることが必要である。

(3) 学びの質を保障する協働学習

アクティブにするだけでは、「学びの高まり(広がり)と深まり」を実現することはできない。そこで必要なのが、異なる意見とぶれあい続ける中で、自らの見方・考え・感じ方を広げたり深めたりする協働学習である。これにより、「ディープ・ラーニング」by アクティブ・ラーニングを実現することが、アクティブ・ラーニング型学習を価値あるものにする必要要件なのである。また、ペア学習・小集団学習・ジグソー学習など固定的・強制的に集団を組むと、優秀な児童生徒に引きずられる、その子ならではの見方・考え・感じ方のよさを引き出せなくなったり、多様な考えが生成されるのを妨げたりするため、図2のように、どの場面でのような思考を使うのか、個別と協働

学力向上に対する授業の型ごとの役割

授業の型ごとに、獲得する学力が違う。型は、教師と児童生徒の言語比率でもわかる。

Table with 3 columns: 教育学的授業類型 (Pedagogical Lesson Type), 獲得するもの (What to Gain), 3類型 (3 Types). It maps lesson types like 'Teacher-centered' to specific skills and learning models.

図1 四つの学習の型とアクティブ・ラーニングの位置づけ

の位置づけを明確にして、授業設計を行うことも必要である。

具体的なアクティブ・ラーニングの指導案の書き方

(1) 「児童生徒の思考と活動の流れ」とそれに対応した「教師の支援」で構成する指導案
アクティブ・ラーニングは、児童生徒の主体的探究を前提とするため、授業設計時に児童生徒の思考と活動の流れを想定し、それに対応する支援を計画することが絶対条件となる。したがって、よく見られる「主な活動」と「教師の発問」で構成される指

導案では、アクティブ・ラーニングを設計することはできない。

(2) 指導案作成時の授業設計の具体的なポイント

指導案の作成は、下記の授業設計の具体的なポイント(表)に基づき、図3のように行うとよい。【導入(問題発見)】・以下の4種類の問いの生み出しで、必然的に本時の目標を達成する学習問題が生まれる資料提示・活動設定である。①既有的経験や既習事項とのズレ、②他者との意見の対立・結核、③目的達成のための障害克服、④素朴な疑問からの問題意識の醸成・学習問題を児童生徒の言葉・疑問形(「〜だろうか」など)としているか。